

## 和牛と草

岡山県和牛試験場 場長 林 正 夫

草の習慣に因んで、何か寄稿をと依頼されたけれども、雑務に明け暮れる昨今、例年のない暑さも手伝って、到底満足なことが書けそうにないが、しかし、少なくとも頼まれたことに対して何とか責を果したいものと筆をとることにした。

実際問題として、和牛試験場という職域にあつて、和牛飼育農家への普及効果をねらいとした、謂わゆる応用的な試験研究調査を行なうことが業務の主軸となるということは、極めて当然なことであるが、業務を円滑に効果的に推進するためには、それ以前の問題として、草を作ることがすべてに優先することが身にしみてよくわかった。

昔から言われている和牛は草で飼えということは、これからは今まで以上に重要な和牛飼育の原則であろう。和牛は、その生理的機能が草で飼えるようにできている。飼い易いという点においては、他の家畜の追従を許さない。発育の盛んな子牛の育成時代から濃厚飼料に頼り過ぎると、ビタミン、ミネラルなどの不足とか栄養分のアンバランスとかにより、しっかりした体格の牛ができにくく、繁殖雌牛なども繁殖障害に陥り易くなるなどの危険がある。

ずっと以前の話で恐縮だが、和牛の一生を通じて、いろいろな過程のものの飼養に、濃厚飼料を全く用いないで飼った試験が、元の農林省畜産試験場中国支場で行なわれたが、粗飼料の質さえよく吟味して、極力腹一パイ食い込ませれば、肥育の場合を除いて、大体満足できる程度に飼うことができるという結果が出ている。

昨年欧米を視察して帰えられたさる和牛の大家も、「和牛の繁殖雌牛に濃厚飼料を与えるという観念は、もはや改めるべきだ。」と言われたが、もはや全くこのように割り切る時期に来たのではないか。

畜産経営が多頭飼育に指向して、企業的にとり上げられ、何万羽養鶏とか、酪農や養豚の大規模共同化がマスコミによって紹介されているが、これらの中には、極端に言えば土地をもたないでも、すべて購入飼料で乳を搾り、卵を産ませ、肉豚をつくる。

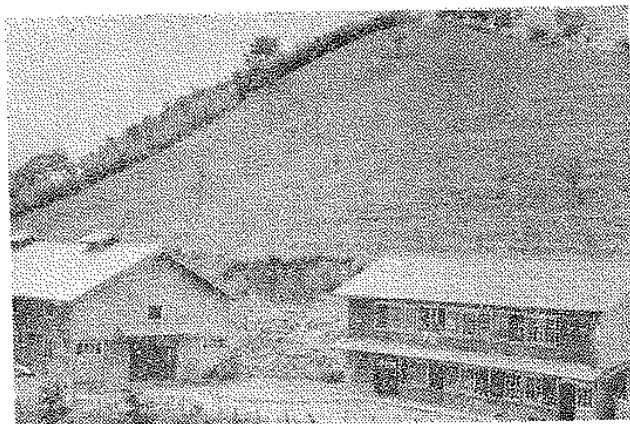
即ち乳牛や鶏や豚は、それぞれの畜産物を製造する工場が機械のようなもので、もはや畜産の属する第一産業の範囲からは逸脱した形となっているといつても言い過ぎではあるまい。

和牛——肥育牛は別として——は、このような大げさな取り扱いは向かないが米作りなどと併行した形で、地道に健全に多頭化へのコースを進むだろう。

和牛の長所をとり上げて見ると、草で飼えるので畜産の強味とするところの、耕地以外の農用地の利用度を高めて生産をあげることができること、現に資源が相当あるので、比較的少額の資本で経営拡大も可能なこと、労力の質量がともに他の家畜に比べて劣悪かつ少量で間に合うこと、技術の巧拙が他の家畜ほどには採算上はつきりしないこと、などいろいろあると思っている。(但し、裏返して別の観点から見れば、長所は短所に通ずるわけで、反省材料もある。)

今春、上房郡賀陽町の〇さんという肥育農家を見せていただいた。〇さんは旧い牛舎の牛房との間のマセン棒を全部取りこわして、スタンションを導入して、收容能力を大きくして、狭い牛舎を広く使い、若令肥育の多頭化を行い、持山を集約牧野に切り開いて、上手な経営をしておられた。勝田郡の方でも水田裏作に飼料作物を積極的に導入して若令肥育に実績を挙げている良い例が見られる。

他の家畜が利用しかねるほどの土地が、和牛の放



きれいに牧草導入された急傾斜地

## 岡山畜産便り 1961.09

牧採草地として利用され、生産の手段として利用されるところに和牛の強靱さがうかがえる。草で飼える和牛に、前途した例のように、もっと良質の草をたくさん与えたい。

ところが、反面次のような例もある。即ち、岡山県北部の放牧の盛んな生産地では、今もって荒廃した自然草地——場所によっては灌木林という方が適当な——に、文字通り放牧している所がある。手がかからないから、生産コストは安くつくが、過ぎたるは及ばざるが如しで、生産が押しえられては徒らに貴重な牛資源を遊ばせるに等しい。さて、漸く牧野改良事業が進行し出したことは、誠によろこぶべき現象と思っている。野草と稲ワラだけの和牛的飼育から一日も早く脱却したい。

和牛試験場近辺は、和牛の古い産地として全国に名高い「千屋牛」の産地である。この頃は、未明から朝草刈りが欠かせない日課の一つとなっている。一人当たり 60kg の草を刈るのに、往復を含めて 2 時間かかったとして、1 kg 当りの野草の単価を計算して見ると、労賃を 1 時間 40 円と見て 1.3 円となる決して安い草ではない。話は少しばかり飛躍するが、今の放牧場の中、頂点に近い半ば 3 分の 2 位までを植林して、麓の方の半分か 3 分の 1 かを草生改良して、友当り草量——質の改良ももちろん——を今の 4 倍にし、これに集約的？な輪換放牧をしたらどんなものだろうか。朝草刈りの重労働から開放されて、牛は放牧場で草だけで丸々と太り、よく生産を挙げてくれると思われるがどんなものだろうか。もっとも現実には、土地の所有権の問題などいろいろなことがからんで、思いどおり順調に事が運ばない面もあるけれども。

今から数年の後、この拙文を読み返す機会があったならば、「なんだ、こんなことを。」と、今昔の感にたえないだろうと想像しながら、思いつきを書いて見た。

最後に、この和牛試験場は極めて急傾斜の放牧場と、起状の多い狭い圃場という制約された条件の下で、和牛の肥育と改良増殖、飼料作物の栽培、草地改良、放牧などの試験研究などを行なっているが、将来の行き方として、夏季における効果的な肥育、肥育繁殖何れにしても省力管理による和牛の多頭飼

育の経営試験、草地を利用しての若令肥育素牛の育成についての経済試験、急傾斜地をうまく草生改良して、畜産によって収入を挙げるためのパイロットファームのような特色をもった試験場として、機能をうまく発揮できるようにもって行きたいものと考えている次第で、これについて関係各位からの暖かい御叱正と御鞭撻をいただきたいと念願して拙い筆をおく。

(1961. 8. 16)

新農村 築く基いの 草造り  
若草で 家畜肥やして 金もうけ  
畜産の 伸びは草地の 出来で知れ